

撃手

Narumi Shō

鳴海章

長編冒険アクション小説



KOBUNSHA BUNKO
光文社文庫



光文社文庫

長編冒険アクション小説

撃

つ

著者 なる 鳴 海 しょう 章

1999年12月20日 初版 1 刷発行
2004年 6 月10日 4 刷発行

発行者 篠 原 睦 子
印刷 慶 昌 堂 印刷
製本 明 泉 堂 製本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Shō Narumi 1999

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-72926-6 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03 3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編冒険アクション小説

撃つ

なる み 鳴海 しょう 章



光 文 社

目次

プロローグ	アフリカの匂い ^{にお}	5
第一部	狙撃兵 ^{そげきへい}	15
第二部	俘虜 ^{ふりよ}	105
第三部	落武者 ^{おちむしや}	193
第四部	撃つ	281
エピローグ	太った蠅 ^{はえ}	369
解説	大多和伴彦 ^{おおたわともひこ}	379

プロローグ アフリカの匂い^{にお}

切り出した石で造られた階段だった。

一段登る。ブーツの固い底で、小石が鳴る。それがはつきりと聞こえた。

耳から絶え間なく侵入し、脳を分解しそうな虫の聲が途絶^{とだ}えている。静寂の中に放り込まれていた。

風が微^{かす}かに頬^{ほお}を撫^なでる。手で触れられそうに濃密な臭^{にお}いが顔を包んだ。緑色に変色した、腐った卵を連想させる。

息を詰める。が、無駄だ。呼吸まで止められやしない。

また、一段登る。

カトリックの教会だった。建物自体は赤茶色の煉瓦^{れんが}で造られている。入口の上に白いキリストの像。十字架に両腕を広げ、恥^はずかしげに足を窄^{すぼ}めて、うなだれ、来訪者を見下ろしている。煉瓦の赤とキリストの白。その向こうに黒っぽくさえ見える蒼^{あお}い空。キリストの顔には雨垂^{あまだ}。

れが黒い筋を描いている。

また、一段登る。腐敗臭がきつくなる。

アフリカ某小国。国境にほど近い村をトラックで出発し、幹線道路を左に外れ、さらに一時間近く走った。道路は未舗装だった。雨期に泥の川となる道路には絡み合う蛇のような轍が何重にもでき、所々に深い穴まで開いている。轍で滑り、穴を避けるため右に左にハンドルを切るトラックはひどく揺れ、荷台に座っている男たちは幌の杵をつかみ、軀を支えなければならなかった。

後輪のダブルタイヤが巻き上げる埃は、ブレーキをかけるたびに荷台の男たちに降り注いだ。汗に濡れた顔はどろどろ、舌はざらざらになる。

カーキ色の服、迷彩布で覆ったヘルメット、傭兵たち。

俺は荷台の一番後ろで放り出されることばかり心配していた。

幹線道路を外れて一時間走ったが、距離にすれば十五キロか、せいぜい二十キロだ。時速三十キロで走れば、荷台の男を確実に振り落とす。

反政府ゲリラが出た、と通報が入れば、そのたびに一個小隊が派遣される。駐屯所には日に一度か、二度は似たような通報が入る。そのたびに出動する。が、ここ一ヶ月ほど、敵の姿を見ていない。

荷台の顔は、どれも弛緩^{しかん}しきっていた。

ゲリラ目撃の報があつたのは、丘の上の一帯だ。カトリック教会を中心に数十世帯があつた。過去形だ。今、その集落は存在しない。

小隊の誰もが知っている。俺たちが向かっている教会こそ、集落の人間すべてが虐殺^{ぎやくさつ}された現場であり、一ヶ月前のまま放置されている。白人たちの情けにすぎり、金を引き出すためには効果的な装置だった。

虐殺のきっかけは傭兵部隊、つまり俺たちの進駐だった。

到着して、小隊はだらだら散開した。

俺だけが小隊長に呼び止められ、教会の正面入口から入って内部を搜索するように命じられた。

誰もが嫌がる仕事をへ黄色に無理強いすることで、わずかばかりの優越感を手に入れる。いつものことだった。こつちもすんなりと奴をよがらせるつもりはない。だから、平然と、あつさり、命令を受けた。

小隊の半数が黒人、四分の一が白人、残りがラテン系、東洋系だった。小隊長は元米陸軍軍曹の黒人で、唇の端に唾^{つば}の泡を溜めて喋^{しゃべ}る。そして俺は東洋人。過去数百年にわたって、黒人が白人に虐^{しいた}げられ、搾取^{さくしゅ}されてきたという小隊長の思いこみは、三種類以上の人種が交じると、なぜか黒と白以外に向けられる。

人種的に第二の地位を確保しようとしているのか。必死で、切実だ。

階段を登りきった。両開きのドアは左側がない。右側も蝶番ちようつがいのところで斜めになっている。ドアのペンキは日に焼け、雨に打たれてひび割れ、ぼろぼろになっている。教会の中は薄暗かった。

自動小銃は肩から吊ったベルトで、腰の辺りで銃身が水平になるようにしてあった。グリップを握り直す。微かに金属音がする。銃口を右へ左へ振る。フランス製、古ぼけた七・六ミリ口径の自動小銃は傭兵の標準装備品だった。

臭気は粘土のように鼻と喉を塞ぎ、目玉を押さえつける。

刺激臭の塊かたまりに踏み込む。

礼拝所に入っただけのところに赤いワンピースを着たミイラが転がり、顔をこちらに向けていた。小さな軀は縮んでしまったのか、それともまだ少女なのか。しわだらけの顔に目はなく、眼窩がんかがぼつかりと開いている。灰色になり、乾いた目玉に見つめられなくて幸いだった。

開いた口に白くて短い歯が並んでいる。スカートがめくれ上がり、乾燥し、半ば白骨化した細い足の付け根までが剥き出しになっている。

赤いワンピースのミイラは、さらに小さなミイラを背負っていた。こっちは紫色のワンピース。妹だろうか。二人は軀を横向きになっている。妹の頭は一メートルほど離れたところに転が

っていた。

それでも小さな手は姉の肩をしつかりとつかんでいる。

妹の頭は半ば白骨化している。その眼窩や開いた口の中から甲虫こうちゅうが這い出してきた。楳円だえん形をした背はつやを帯びた黒だった。

甲虫は列をなし、俺の足元に近づいてくる。ぞろぞろ。妹の小さな頭蓋骨ずがいこつの中にびっしり詰まっていた甲虫は、三、四十匹か。楳円の胴から小さな頭が突き出し、毛の生えた触角しよくかくを動かしていた。

死肉に飽き、新しい肉と温かい血を求めている。

踏み潰した。固いブーツの底を通して、ぐしやりと感触が伝わる。何度も何度も踏み潰した。甲虫が潰れた後に、赤い液体がベツトリとついている。胴体を半分潰され、残った足で方向転換していくのも、頭を失い、ひっくり返ってもがいているのも、精密機械のような細い脚を盛んに蠢うごめかしている。

彼女の小さな脳を食った甲虫をすっかり潰して、唾を吐いた。これで彼女も完璧かんぺきに死んだ。狭い通路の左右にベンチが並んでいた。ベンチの背は後ろの席から手を置けるように柵のようになっている。

ベンチに座ったままのミイラが一つだけあった。前席の背に両腕を置き、指を絡ませている。その上に突っ伏していた。最後の瞬間まで祈っていたのだろう。そのミイラには頭の上半分が

なかった。縮んだ耳が突き出し、乾涸^{ひから}びている。

教会で殺戮^{きつりく}は行われないと信じていたのだろうか。教会でもどこでも後頭部に銃口を押し当て、引き金をひくと、頭頂部はきれいに吹っ飛ぶのだが。

通路の突き当たり、壁にマリア像がかかっていた。ほぼ等身大だ。顔に弾痕が三つある。自動小銃の引き金を絞り^{しぼ}りつ放しにして振り回したのだ。壁には、マリア像の右下から左上へミシンがけをしたように一直線の穴が穿^{うが}たれている。

マリアの顔は通過点にあった。

その像の下に死体が折り重なっている。肉が溶け、粘土状に混じり合っている。臭気が一段と凄^{すさ}まじい。

ゲリラが侵入した直後が容易に想像できる。入口付近で姉妹を殺し、祈っている男を射殺した。銃声でパニックを起こした信者たちは悲鳴を上げてマリア像の下へ殺到する。追い詰められた信者は少しでも後ろに下がろうともがき、血走った目が脱出口を求めて狂おしく動く。そして赤い口を精一杯に開いた祈りが、嘆願が、叫びが聞こえる。

自動小銃の威嚇^{いかく}連射。マリアの顔に着弾、埃が舞い上がり、震える信者たちに破片が降りかかる。

そして虐殺が行われた。

溶けかかった堆積^{たいせき}の中で手が動いた。

心臓が竦む。反射的に銃を向ける。

苦笑いが漏れた。さっきと同じ甲虫が死体の腕にびっしりとたかっている。死体の肌が黒いために見間違った。竦んだ分を取り戻そうと、心臓が鳴っている。てのひらが汗ばんでいる。

むかついた。が、気持ちのやり場がない。苦笑を続ける。

通路をゆつくりと歩いた。左右を見渡す。ベンチの下に倒れているミイラは両手を組んで顔の前に出している。助命は聞き入れられなかった。

銃を持つ者は神になる。嘆願の祈りを聞くことも、蹴飛ばすこともできる。指先のほんのちよつとした動きで、生命を吹き消せる。

万能感は至上の快だ。

重い頭痛がしてきた。嗅覚はとつくに鈍麻どんましているが、脳がついに悲鳴を上げたらしい。あるいは有毒ガスが発生しているのかも知れない。

臭いを感じてから鼻から息を吸い込まないようにしていた。それでも臭いは肌に浸透してくる。

穴だらけになった説教台の向こうに、黒い服を着たミイラがある。両足を投げ出し、壁に背を預けて座っているように見える。

神父だ。

黒い服の裾すそが広げられ、ズボンも下げられていた。剥き出しになった股間の肉はすっかり溶

け、骨盤がのぞいている。うつむいた口に、しなびた棒状のものが突っ込まれていた。恐らく性器を切り取られ、口に入れられたのだろう。それも生きているうちに、だ。死体を破壊しても、面白味はない。

頭痛が耐え難くなった。

説教台の前を通り過ぎ、祭壇のわきにある小さなドアから裏庭に出た。ほっとして息を吸い込む。

後悔した。

教会の中ほどひどくはないにしろ、腐臭が鼻を突く。裏庭の芝生は荒れて伸び放題になっていて、その狭間^{はざま}に数十もの死体が転がっている。肉が熟^うれていく臭いは、肉食動物にとっては芳香なのだろう。死体は一つとしてまともなのがなかった。

ふと気配を感じて顔を上げた。裏庭の端にしゃがみ込んだ子供がいる。生きている。

真っ黒な肌をして髪の高い男の子だった。五歳くらいに見えるが、栄養状態が悪いと年齢に比べてはるかに幼く見える。アフリカにはそんな子供がたくさんいる。

彼は小さな手にライフルを持っていた。躰に比べて大きすぎるライフルは、銃床を地面に置いていたようだ。

目と銃口は真っ直ぐに俺に向けられていた。銃口と俺との距離はせいぜい三メートル。至近

距離だった。

口がからからに渴き、体が動かない。

だが、脳だけが勝手に暴走する。逃げ道を考えていたのではない。今までに見てきた様々なシーンがフラッシュしながら流れていくのだ。まるで死を目前にしたみたいじゃないか。

やめてくれ。

やめてくれ。

俺は声にならない叫びを上げていた。

第一部

狙撃兵